



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 『瑜伽論記』に見られる新羅僧の唯識教学の研究

研究課題(英文): Consciousness-only theory of Shilla Monks in the *Yuqie-lunji*

申請者名・所属先: 高橋晃一・文学部

海外招聘者名: 金成哲

1. 研究の目的

インドの大乗仏教の一翼を担う学派である瑜伽行派(ヨーガーチャラ)は、唯識説を主張した学派として知られており、日本に伝わった法相宗はこの流れを汲んでいる。この学派の基本典籍に『ヨーガーチャラブーミ』というものがある。三蔵法師として知られる玄奘(602?–664)はインドでこれを学び、帰国後、『瑜伽師地論』として訳出した。極めて浩瀚な典籍で、玄奘の翻訳で全百巻になる。この玄奘訳『瑜伽師地論』に対して、『瑜伽論記』という註釈が残っている。作者の道倫(または遁倫、700 年ごろ)は新羅出身の学僧で、法相宗の祖である基の弟子であり、玄奘から見て孫弟子にあたる。本研究課題は、この『瑜伽論記』を研究対象とする。

『瑜伽論記』は『瑜伽師地論』全体に対する極めて詳細な註釈で、玄奘の翻訳の難解な箇所を多角的に分析し、解釈している。本研究では、『瑜伽論記』の記述から、道倫自身の思想傾向について分析する。

2. 研究開始当初の背景

『瑜伽論記』には約20名の唐代の学僧の見解が随所で引用されており、その中には、元暁、神昉、憬興、円測、玄範など、新羅の学僧が11名含まれていると言われているため、7世紀頃の中国・朝鮮半島の唯識教学の状況を伝えているが、その全体にわたる研究はこれまでなされてこなかった。

3. 研究の方法

道倫が伝える中国・朝鮮の仏教思想家たちの所説を整理し、道倫の学識の背景を明らかにするとともに、道倫自身の思想傾向について分析することを目的とする。その際、同じく新羅出身の学僧であり、基と同時代に唐で唯識を学んでいた円測(613–696)の『解深密経疏』との比較も、必要に応じて行う。

4. 研究成果

玄奘訳『瑜伽師地論』を読解しながら、道倫の『瑜伽論記』を並行して読み進め、『瑜伽師地論』の難読箇所に対する道倫の解釈を整理した。また、新羅出身と思われる僧に言及する箇所のリストを作成し、思想傾向を調査するための資料を作成した。



5. 主な発表論文等

〔その他〕

高橋晃一「無我と慈悲—唯識思想の観点から—」(東京大学ヒューマニティーズセンター 第 64 回オープンセミナー、2022 年 5 月 13 日、Zoom オンライン)

高橋晃一「『瑜伽師地論』の伝承について」(東京大学ヒューマニティーズセンター 第 52 回オープンセミナー、2022 年 1 月 28 日、Zoom オンライン)

高橋晃一「唯識思想における他者の存在」(第 625 回武蔵野大学日曜講演会、2021 年 11 月 21 日、武蔵野大学・武蔵野キャンパス・雪頂講堂)

6. 招聘フェロー(海外招聘者)からのコメント

東京大学での研究を強く望んでおりましたが、コロナ禍により日本への入国ができず、研究期間を延長し、時機を待ちましたが、それも叶いませんでした。折角、研究の機会をお認めいただきながら、十分に活かすことができなかつたことは大変残念に思います。(金成哲、金剛大学教授)